

Title	追悼 生田正輝先生：「メッセージ@pen」にみる血流
Sub Title	
Author	望月, 一雄(Mochizuki, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2014
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.64 (2014. 3) ,p.168- 168
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20140300-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



「メッセージ@ pen」にみる血流

望月一雄

メディア・コミュニケーション研究所と綱町三田会の共同編集の慶應義塾創立150年記年誌「メッセージ@ pen」が2008年（平成20年11月）に完成し、翌年2月14日「同出版を語る会」が交詢社で行われた。このプロセスを考えると、生田正輝慶應義塾大学名誉教授のライフミッションの中には新聞研究室（1946年10月発足）から、綱町三田会（1950年3月発足、今日に至る）まで一貫して慶應義塾社中のジャーナリズム学を軸にした人間開発があったと思う。この生田イズムの底流には“寄付文化”の導入によって、メディア関連企業がもつ現場哲学と国際性を学ぶ道筋があった。当時の新聞研究所（1961年3月名称変更）に放送三田会寄付講座として1962年放送講座の開設も“方今至急の要務”だった。

これは従来の新聞・雑誌の紙メディアに、新たにわが国に於いて電波メディアを学問大系として構築した点に意義があり、「所史稿本」（1985年6月発行、新聞研究所）や、「秘史」（中川順著、講談社）に見られるが、その後の寄付講座として、朝日新聞、フジテレビ、そして電子メディアとしてNTTが続く導火線となった。また新聞研究所主催国際セミナーの開催（1983年）などの国際性にも腐心した。

話を「メッセージ@ pen」に戻そう。その「同出版を語る会」で生田名誉教授は冒頭の挨拶の中で、「私は化石のようになったが、こうして研究所と綱町三田会が一体となって、塾150周年記念として、「メッセージ@ pen」が完成したことが喜ばしい。然も綱町三田会179名、168万3千円の協賛。これを使途指定寄付として塾へ寄付すること自体、新しい文化ではないか」と述べた。

その編集実務を担当した亀井洋二君（昭和35年経卒）、甲本仁志君（昭和35年文卒）、山本正郎君（昭和35年文卒）、高野英男君（昭和38年商卒）、箆絃矢君（昭和39年法卒）と望月一雄（発行責任者、昭和33年経卒）の編集6人衆。尾中信明君（昭和34年経卒）、船津於菟彦君（昭和36年法卒）他13名の編集委員の協力で、会員から98本の原稿が集まった。まさに「丘の上90年（研究室発足が塾創立90周年）、そして150年」の一貫編集が結実した。新聞研究所所長在任中（1973年10月～77年9月）にふれて「今日に至るまで、ジャーナリスト、マスコミ人の養成に重点を置くか、マスコミュニケーションに関するアカデミックな研究に力点をおくという事は、一貫して論じられてきた課題である。しかしながら、研究所の基本的な性格は、この綱町時代に形成されたといわなければならない。」（「メッセージ@ pen」と発足当時の辛・苦・楽を記述している。多事争論（1875年「文明論之概略」巻之一）の多元主義的発想を連想するが、大学紛争という時代背景もあって研究所と綱町三田会との連携が薄れた。

この事態を憂いて昭和35年、36年組を中心に有志が“活性化”にむけて立ち上がった。諸先輩のアドバイスを参考にしてこの連携強化の一点。2001年1月に臨時総会を開催。名誉会長生田正輝、会長関根正美（研究所所長兼任制）、代表幹事望月一雄、副代表幹事船津於菟彦及び会則規約の一部改正で当面スタートした。

蘇生、綱町三田会運営費は会費制の検討もあったが、結局“寄付文化”の導入で会員対象に研究所と綱町三田会の5年ごとの周年事業として、第1回は、「綱町三田会50周年寄付」（2001年実施）で、爾来、今日まで継続中である。生田正輝名誉教授が、「私学である以上、寄付はエネルギーの源泉」と毎年3月実施の修了生・OBOG懇親会の席上挨拶していたことが耳新しい。

現・代表幹事 瀬下英雄君と副代表幹事委員で、電子版ジャーナル誌「メッセージ@ pen」が毎月発行され、会員及び研究生間の血流になっている。その奥底に「社会のなかの個人、個人のなかの社会」（パネルディスカッション・ニュースを読む力、学問のすすめ21、vol.13大石裕・当時所長）という言葉が日々の行動価値観の示唆に富む。

望月一雄（1958年（昭和33年）経卒 元横浜ゴム）